



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	書写指導における漢字の「送筆」についての基礎研究
Author(s)	長野, 秀章
Citation	東京学芸大学紀要 . 第 5 部門 , 芸術・体育, 41: 293-302
Issue Date	1989-10
URL	http://hdl.handle.net/2309/12166
Publisher	
Rights	

書写指導における漢字の「送筆」についての基礎研究

長野 秀章

(書道)

はじめに

学校教育における文字教育の中で、漢字の指導に関しては、小学校、中学校、高等学校を通して行われる。仮名に比べ漢字は、その字数も多く、形においても単純なものから複雑なもの、あるいは類似性の高いものなどがあり、その習得にあたっては色々と工夫がなされるところでもある。特に小学校における漢字の指導は、国語科教育という大きな視点に立つても、言語事項の書写指導においても大変重要な領域であると言える。

小学校、中学校の国語科書写において、漢字の字形指導は、その中核をなす指導と言っても過言ではない。特に小学校における漢字指導の際の字形の基準は、昭和五十二年七月告示の学習指導要領の教科国語の「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の中で、「漢字の指導においては、学年別漢字配当表に示す漢字の字体を標準とすること。」とあり、教科書体活字を用いて示された。この小学校の学習指導要領で示されたということは、中学校においてもまた、高等学校においても漢字指導において大きな基準が示されたということになる。この「字体の標準云々」に関してはこれまででも色々と議論されて時

には、問題点として指摘されたりしているが、藤原宏氏の言う「字体は文字の骨組み」という観点に立てば、たまたま小学校教育では教科書体活字が馴染みがあるということであって、字形の一例を示したと考えればよいのである。

しかし、例として示されたとはいえないものの、毎日学校現場で漢字指導の最前線で指導にあたっている、とくに小学校においては、この「字形」にかなり拘束されるのも当然であり、また、示す以上細かい点において今一つの配慮（長短、接筆等）があってもよかつたのではないかと考えるのも無理のないことである。しかも、平成元年三月に告示された指導要領において漢字の字数の移動はあっても、漢字の字形に關しての考えは受け継がれ、前述した細かい点への配慮はなされないまま示された。

漢字に関しては、これまでも部首や音訓等のいろいろな角度から分類がなされているが、書写指導という立場からの分類は、久米公、鈴木慶子両氏による論文（注1）がかなり漢字を細部にわたり分析しており、その分類表は、今までにない書写的分類とし評価できるもので

ある。しかし、字形指導の際の最も基本的かつ重要なことは、漢字を構成している点や画を書写的立場から概念規定をし、それを分類することこそが、書写指導、字形指導の第一歩であり、学年別漢字配当表に示す字体に書写的血液をさらに通わすことになるのではないかと考える。以上のような観点にたつて今回は、学年別漢字配当表に示される「字形」を踏まえ、それに私流の文字感覚を少し加え、画の「送筆」に焦点をあてた試論を述べることとした。

一、送筆について

(一) 送筆の形について

送筆とは、始筆と終筆の中間に表われる筆使いの一つであり、書写指導において一般的に直線的な部分と取りたてて形が表われる「折れ(おれ)」、「曲がり(まがり)」、「反り(そり)」とがある。

また、文部省から出された「指導計画の作成と書写の指導」(注2)の中で基本的な点画の筆使いの例として送筆に関しては次のように示されている。(図1)

曲がりの例として三番目にあるのは、平仮名の送筆の形の例で、それを除いては漢字(片仮名も含む)の送筆の形の例を示したものと考えられる。(但し「そり」の一、三番目の例は片仮名にはない)

従来、例えば送筆の「折れ」というと、その筆を送る運動を示す「折れる」と混同して説明されていた感があり、ここでいう「折れ」とは送筆の形であり、ある一定の状態を指す名称と考えたい。したがって名称と動詞との区別を次のように示しておくことにする。

- (送筆の形(名称) 動詞(解説、説明上の用語))
- 「折れ」——「折れる(折る)」
- 「曲がり」——「曲がる(曲げる)」
- 「そり」——「そる」



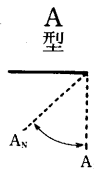
図1

このような基本的な用語にこだわる理由は、ある程度送筆の形の概念規定をしたいがため、私見においては、例えば前述の「そり」の二番目の例であげられている左払いの送筆の「そり」は、運動としては「そる」が、表現上やや幅がありここであるという「そり」の形の例としては認めたくないと考えるからでもある。本論は、送筆の形としてそれぞれの形の特徴が表れやすい「折れ」、「曲がり」、「そり」の三種類に絞って論を進めることとする。

(二) 「折れ」の形

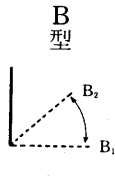
(1) 「折れ」の概念規定

「折れ」を大別すると次の三種類になると考える。

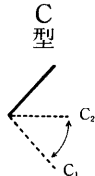


(横画から展開する型)

(※A型は、角度の違いがA型の中での型の違いになり、分類した場合個人差により多少違いが生ずると考えたので、A型の場合は、



(縦画から展開する型)



(斜めの画から展開する型)

以上の三つの型で、指導の系統性や頻度等を考慮しA、B、Cの順で述べたが、その際、それぞれの中での順位はその型を代表すると思われる型から順に述べた。

(2) A型の系統

次に示す3例は、それぞれの折れに対応する縦画を有している型で、

その前面からいうと縦画の傾ける角度に対応して折れてからの角度が左右するという考え方もできる。この分類は学年別漢字配当表(以下別表という)に示す字形に多少私見を加えて分けた。ただ、その論拠(角度の違い)は、折れてからの縦画の長さに比例するのではないかと考えた。つまり、同じ左へ折れる型でも折れてからの縦画が長ければA型(ほぼ直角)に近くなり、短くなるとより深く左へ折れるのではないかと考えた次の三つの型に分類した。

なお、別表の総ての漢字を分類せず、代表的な文字をあげた。その理由は、A₁型とA₂、A₃型との区別に比較的容易と考えるが、A₄型とA₅型との区別はかなり微妙な文字もあり、そのような「揺れ」を例えば、分度器などを使って細かく分ければ、かえって別表の「字体」をいわゆる字体として考える結果となり、一字形を示したという意図とは離れることと、概念を規定することが本論の目的であり総ての文字を分類することはこの場合あまり意味のないことと考えたからである。しかし、別の意味で「折れ」のある漢字は総てあげ、私的分類は試みた。(後述)

- A₁型 (垂直に折れる)
 - 日₁、目₁、国₂、凶₂、門₂、周₄、再₅、冊₆
- A₂型 (A₁型よりやや左へ傾く)
 - 雨₁、田₁、白₁、回₂、向₃、曲₃、由₃、面₃
- A₃型 (A₂型よりやや左へ傾く)
 - 口₁、中₁、虫₁、買₂、血₃、皿₃、票₄、罪₅

(※例字は教科書体活字を使用した。別表に示されている同じ活字ではない。また、その選定においてはなるべく単一文字か、

ないしは複合文字でも上下の組み立てからなる文字を選んだ。
文字の左下の数字は配当学年を示す。

次に示す三つの型は、類似性の高い型ではあるが、それぞれ微妙に
違い、とくにA₄型とA₅型は、対応する縦画を持たない型である。

○A₄型(A₂型とほぼ同じ角度で、やや右にそりながら終筆ではねる。)

刀₁、カ₁、刀₂、馬₂、鳥₂、島₃、包₄、句₅、胸₆

○A₅型(A₃型とほぼ同じ角度で、横画がやや右下へ向き、折れてから
少し右にそりながら終筆ではねる。)

方₂、万₂、場₂、物₂、族₃、別₄、易₅

○A₆型(A₂型とほぼ同じ角度で、対応するC型の折れと組み合わせで
折れてから少し右にそりながら終筆ではねる。)

母₂、每₂、海₂、(慣₅)

次の示す二つの型は、横画からほぼ四十五度方向へ折れてから終
筆で払う型で、A₇型は前画に短い左払いを伴うか、さらに左払いと
ほぼ九十度方向に接するか交わる点や画(右払い)を有し、A₈型は
左払いとほぼ九十度方向に接するか交わる点や画(右払い)を有す
る型である。

○A₇型

フ₁、タ₁、名₁、色₂、冬₂、多₂、久₅、(夏₂)、(然₂)、(処₆)

○A₈型

又₂、友₂、予₃、福₃、受₃、反₃、初₄、令₄

次に示す型は、A₇、A₈型の類型ではあるが、連続して折れが展開さ
れる型である

○A₉型

了₂、了₂、近₂、道₂、級₂、部₃、建₄、防₅、吸₆

次に示す二つの型は、折れてから「曲がり」を展開するのがA₁₀型で
折れてから「そり」を展開するのがA₁₁型である。

○A₁₀型(「曲がり」を伴う。)

乙₁、九₁、丸₂、究₃、投₃、航₄、熱₄、築₅、机₆

○A₁₁型(「そり」を伴う型)

乙₁、気₁、汽₂、風₂、飛₄

以上、横画から展開する例を十一の型に分類した。A₇型でカッコ付
きで示したが、同じ型であっても単一文字の場合と複合文字となつて、
漢字の部首や部分になった場合など角度や形の変容が見られることが
あるので、そのことも理解しておくことも重要である。

(3) A型文字の代表例(→(比較的「折れ」がその文字構成上大きな
位置を占めると考えられる文字群)

一年——雨、円、氣、九、月、口、四、夕、中、田、日、白、氏、名、
目、力、貝

二年——回、問、国、自、囟、西、切、組、多、冬、刀、同、南、風、
聞、母、每、明、門、用、園、角、週、内、肉、丸、羽

三年——開、曲、血、向、取、助、商、申、調、動、畑、物、面、問、
由、両、相、皿

四年——困、各、関、固、功、司、周、初、的、働、包、

五年——因、各、旧、均、句、個、再、祖、団、飼、
 六年——閣、簡、机、胸、勤、鋼、困、冊、詞、処、潮、納、閉、幼、朗
 (4) A型文字例(二) (A型が二ヶ所以上見られる文字群)

一年——男、

二年——遠、歌、記、帰、魚、強、語、高、弱、書、場、色、晴、多、
 昼、鳥、通、頭、道、買、鳴、野、曜、話

三年——暗、員、運、泳、馱、温、階、館、客、急、宮、橋、局、君、
 輕、祭、事、習、暑、昭、勝、神、題、追、都、投、島、湯、登、

四年——胃、塩、加、課、官、管、願、喜、器、漁、協、競、極、郡、
 配、鼻、品、負、部、服、福、返、勉、命、役、予、陽、落、路、

景、建、健、驗、最、刷、殺、察、唱、照、賞、靜、節、說、
 選、争、倉、象、置、腸、努、飯、飛、費、副、別、辺、勇、

五年——易、移、永、嘗、衛、過、賀、解、格、慣、眠、居、興、群、
 險、護、厚、講、際、酸、師、資、識、謝、序、招、承、常、

設、絶、造、像、增、属、損、退、敵、適、銅、導、破、版、
 肥、貧、婦、富、復、複、編、報、豐、防、貿、務、綿、輸、

預、略、留、領、勢、夢

六年——遺、映、危、貴、疑、吸、郷、筋、敬、警、誤、降、穀、骨、
 視、熟、署、諸、傷、障、蒸、誠、泉、創、層、操、臟、段、

暖、痛、糖、届、認、肺、晚、腹、補、訪、纂、盟、訳、優、
 欲、翌、覽、臨、論、絹、激、盛、誕、暮

(5) B型の系統

この縦画から展開される「折れ」は、大きく分けてB₁型とB₂型の二種類に分類できる。B₁型は折れてから横画(終筆をとめる)が展開され、B₂型は折れてから右斜め上へ払う画へと展開する型である。さらにB₁型の発展した型としてB₃型がある。これにB₁型の折れとA₄型の折れが結合した型で、一画中に二度種類の違う折れを有する型である。

○B₁型(折れてからの横画は基本的にやや右上がり、その「折れ」がその文字の中で大きければ大きいほどその横画は、やや上へそりぎみになる。)



一年——山、出

二年——画、岩、直

三年——医、岸、渠、歯、植、世、炭、島、葉、両、区

四年——置、満

五年——逆、断

六年——胸、鋼、純、値、脳、密、

○B₂型(この型は、終筆が払う型になるが、単に右上へ払う型と払ってから点が接する型と左払いと右払い(とめも有る)を伴う型がある。)



一年——(該当なし)

二年——紙、食、長

三年——飲、階、館、銀、根、帳、農、表

四年——衣、競、氏、節、低、底、飯、民、養、良

五年——眼、限、混、製、退、張、比、俵、貿、留、飼

六年——郷、裁、展、批、陞、卵、裏、朗、收、装

○B₃型(この型は終筆に「はね」を伴う)



一年——(該当なし)

二年——引、強、弟、弓

三年——号、写、第

四年——費

五年——張

六年——(該当なし)

(※この三月に告示された新学習指導要領の別表に「弓」の配当学年が、六年から二年に上がり、従来配当されている他の三字の漢字習得の上からまた、書写指導の上からも大きなことと考える。)

(6)C型の系統

この斜めの画から展開される「折れ」は、折れる角度が開ききみで終筆がとめとなるC₁型と、折れてからやや右上へ払う感じになるC₂型の二種類に分類できる。C₁型とC₂型が連続する形に「糸」があり、次に示す分類にはかなり重複するがあげておくことにする。

○C₁型(この折れる角度は少し幅があり、九十度以上開くと思われる文字と九十度よりやや閉じると思われる文字がある。また、折れる前と折れた後の直線的部分は、その部分が長くなればなるほどそりぎみになる)



一年——系、女

二年——海、絵、後、紙、数、組、母、毎、妹、細、線、姉
三年——安、級、係、始、終、緑、委、練
四年——案、紀、機、給、結、統、孫、努、毒、約、要、好、梅
五年——慣、経、潔、災、妻、織、績、接、絶、素、総、婦、編、綿、率、桜
六年——郷、系、紅、刻、姿、磁、縦、縮、純、納、幼、絹

(※この型の場合一年に「糸」と「女」が配当され、漢字習得上、書写指導上大きなことと考える。)

○C₂型(この型の終筆は右斜め上に払う感じになるが、必ず「点」のほぼ中心と接する形になる。)



一年——系

二年——雲、会、絵、強、後、広、紙、室、組、台、公、細、線

三年——育、屋、級、去、係、始、終、転、流、緑、練

四年——紀、機、給、芸、結、参、統、孫、治、伝、法、約、松

五年——経、潔、鉾、酸、織、績、絶、素、総、態、能、仏、編、弁、綿、率

六年——拡、郷、系、紅、至、私、磁、縦、縮、純、窓、納、幼、絹

(7)「折れ」のまとめ

以上、A型は11種類、B型は3種類、C型は2種のそれぞれの「折れ」を分類した私見を述べたが、ここで「折れ」型にこだわらず一年から六年までの漢字をまとめてみることにする。次に示す学年ごとの数字が「折れ」のある漢字の字数でカッコ内が、配当漢字の字数、その下が配当漢字に対する割り合いを示したものである。

一年——三八字(八〇字)——四七・五パーセント

二年——二九字(一六〇字)——一八〇・六パーセント

三年——一六六字（二〇〇字）——八三パーセント

四年——一五七字（二〇〇字）——七八・五パーセント

五年——一五九字（二八五字）——八五・九パーセント

六年——一四五字（二八一字）——八〇・一パーセント

全学年——七九二字（一〇〇六字）——七八・七パーセント

これらの数字と割り合いを見ると、点画の構成が比較的単純な文字の多い一年生を除き、二年から六年までは全て配当漢字数の八割前後の値を示し、全学年においても八割弱の割り合いとなった。

この割り合いの高さは当然予想できたものではあるが、小学校で学習する漢字の中の約八〇〇字が「折れ」を有する漢字ということになる。このことは例えば、どの文字を取り上げてもだいたい「折れ」の教材文字となりうるということにもなるがそれだけに系統性を踏え、その学年に合った最も適切な文字や言葉を精選することが重要なことになると考える。

今までA型ならA型、B型ならB型の中だけの漢字を抽出してきたが、例えばA型とB型を有するものや、B型とC型とを有するものなどというようにそれぞれの複合型を抽出することは、「折れ」の系統性と考える上でさらに大切なことであると考える。次に示すのは、その融合型の例である。

(8) 複合の系統

○ A+B型の漢字群

一年——（該当なし）

二年——引、画、強、考、弱、食、弟、岩、直、弓

三年——飲、階、館、銀、鼎、号、根、写、植、第、帳、島、農、問、

両

四年——競、節、置、飯、費、満、民、養、良

五年——眼、逆、隈、混、製、退、張、貿、留、飼

六年——胸、郷、誤、鋼、値、展、脳、陞、卵、朗、収

○ A+C型の漢字群

一年——（該当なし）

二年——強、後、組、台、母、每、細、線、姉

三年——育、屋、級、始、終、転、緑、練

四年——紀、給、結、孫、努、妻、約、要、好、梅

五年——慣、経、潔、妻、酸、織、績、絶、態、能、婦、編、綿

六年——郷、磁、縮、納、幼、絹

○ B+C型の漢字群（数字は配当学年）

全学年——強₂、紙₂、郷₂、純₂。

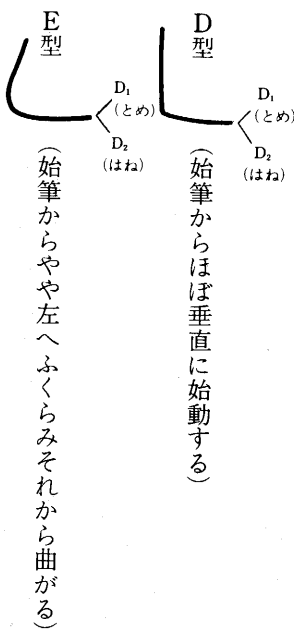
○ A+B+C型の漢字群（数字は配当学年）

全学年——強₂、郷₂。

(三) 「曲がり」の形

(1) 「曲がり」の概念規定

「曲がり」は次の二種類になると考える。



この二種類の区別はやや判別しにくい点はあるが、D型のほとんどが単純であるのに対してE型は、「んによう」のように対応する左払いを伴うのが特徴である。いずれにしてもこの、「曲がり」は、その曲がる所が曲線と考へその前後はその曲がりが不自然にならない為の直

線というような概念を規定しておきたい。特にD型はその感が強く、E型は始筆が左へふくらむ為D型の直線的であるのに対してやや曲線的になる感はある。また、実際に表現する場合は、硬筆と毛筆とでは、前者が大きがほぼ一定であるのに対し毛筆は筆圧の変化により太細が出るので、D型とE型の意識的書き分けは、前者の硬筆の方がより要求されることになると考える。逆に毛筆による曲がりには、縦画が曲がり近づくにつれてやや線が細くなるので、D型として表現してもややE型寄りになる傾向はある。つまり毛筆の方が硬筆に比べD型とE型の区別はやや難しくなることは否めない。

○D₁型(終筆にとめを伴う)

し七₁、切₂、改₄、望₄、劇₆、亡₆、忘₆

○D₂型(終筆にはねを伴う)

し花₁、記₂、色₂、池₂、地₂、電₂、北₂、毛₂、化₃、階₃、死₃、指₃、他₃、配₃、流₃、礼₃、紀₄、選₄

(D₁型の中で「切」や「改」や「望」のように左右の部分からなる文字は、許容される形として「曲がり」が「折れ」になりその終筆は「払い」となる。また、D₂型は「記」や「化」に代表されるように大体文字の右側に有りそれがその文字の最終画になっている為に必然的に終筆が「はね」になるという見方もできる。)

○E₁型(終筆にとめを伴う)

し空₁、四₁、西₂、究₃、酒₃、商₃、深₃、配₃、熱₄、陸₄、酸₅、窓₆、尊₆、探₆

○E₂型(終筆にはねを伴う)

し見₁、先₁、元₂、光₂、親₂、読₂、売₂、兄₂、投₃、発₃、勉₃、役₃、覚₄、完₄、鏡₄、競₄、航₄、殺₄、焼₄、説₄、続₄、児₄、祝₄、兆₄、規₅、境₅、現₅、税₅、設₅、築₅、統₅、机₆、視₆、穀₆、処₆、段₆、党₆、晚₆、覽₆

(E₁型、E₂型のいずれにおいても、左払を前画に伴いD型の曲がりと異なり曲がる前にやや左へそりながら進む感じになる。それは左払いにその的要素がある為に必然的にその左払いに呼応する形でそのような曲がりとなると考える。したがって漢字の部首でいうと「んにょう」と「るまた」と「つくえ」等でそのほとんどが含まれてしまったが、「流」をD₂型に入れてE₂型に入れなかった理由は「流」は対応する左払いを有するもののその左払いと曲がりの間に縦画があり、E₂型に見られるような曲がり方をするとその縦画とのバランスが悪くなるので、D型のような垂直に進んでから曲がる曲がりに分類した。)

○E₃型(前画の左払いと交わってから折れて曲がる型)

し九₁、九₁、丸₂、究₃、熱₄、雑₅、勢₆、熟₆、染₆

次にこの曲がりの学年別の数と配当漢字に対する割合を示すことにする。

一年	七字(八〇字)	八・八パーセント
二年	一六字(二六〇字)	一〇パーセント
三年	一九字(二〇〇字)	九・五パーセント
四年	二三字(二〇〇字)	一一・五パーセント
五年	一七字(二八五字)	九・二パーセント

○G₂型(始筆の始動がやや右へふくらんでからその形)

1) 手家拳極象承像独犯劇呼₆

(このG型の二種の区別はやや判別しにくいので、場合によってはG型一種として考えてもよい。また、G₂型のカッコ付きの四文字は、そりというよりも、やや直線的に表現されると考えたため、カッコを付けた。)

次に、このその学年別の数と配当漢字に対する割り合いを示すことにする。

一年——五字(八〇字)——六・三パーセント
 二年——六字(一六〇字)——三・八パーセント
 三年——一字(二〇〇字)——五・六パーセント
 四年——二三字(二〇〇字)——一・一パーセント
 五年——二一字(一八五字)——一・一・四パーセント
 六年——二三字(一八〇字)——一・二・八パーセント
 全学年——八九字(一〇〇六字)——八・八パーセント

全学年では、一割弱の漢字が「そり」を有する漢字となるが、このそりの基本的概念を理解しているかいないかは、実際の指導に当たっては大きな違いになるのではないかと考える。また、次にそりが一字の中に二つ有する漢字を示しておく。

塾₆ 乳₆

この二文字は、F型とG型の両方の型を有する漢字である。

おわりに

以上送筆の「おれ」、「曲がり」、「そり」のそれぞれについて、概念の私的規定を中心に述べた。文部省の示す学年別配当漢字を書写書道

的に解釈を加えたと言うこともできるかもしれない。序でも述べたがやや別表の問題点が指摘されていることも耳にする時、本稿が問題点と説明するまでは行かなくても活字にやや血をかよわすことができたかもしれないと考える。

やや概念にこだわり細く分類しすぎた感は否めぬが、このようにすることによって硬筆や毛筆の指導の際の送筆の「書き方」が少し鮮明になったものと考ええる。

尚、本稿に使用した教科書活字は、写研の石井中教科書活字である。

注

- (1) 「書写指導のための学習漢字分類②」
第七回全国大学国語教育学会(昭和63年10月21日)
鈴木慶子、久米 公
- (2) 「小学校国語指導資料」 文部省、大阪書籍 昭和五五年

参考文献

- 一、「ことば」シリーズ16 漢字 文化庁 昭和五七年
- 一、日本語学「字体・字形・書体をめぐって」 林 大、「教育用漢字の標準字体」 藤原 宏 明治書院 昭和五九年三月号
- 一、日本語学「国語教育と漢字」 大平浩哉 明治書院 昭和五九年八月号
- 一、言語生活「筆順と字体」 天沼 寧 筑摩書房 昭和四九年八月号
- 一、言語生活「人名用漢の制限について」 乙部一二郎
- 一、言語生活「新漢字表を考える」『漢字の未来』 野村雅昭 筑摩書房 昭和五二年四月号
- 一、言語生活「常用漢字表」 筑摩書房 昭和五六年七月号
- 一、書写・書道用語辞典 藤原宏他 第一法規 昭和五三年
- 一、小学校学習指導要領 文部省 平成元年三月